



絵本における絵と言葉、擬人化の効果についての検討：『ロバのシルベスターとまほうの小石』を例に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国語探究研究会 公開日: 2024-09-26 キーワード: 絵と言葉, 擬人化, 家族愛 作成者: 花坂, 歩, 佐野, みなみ, 小橋, 来実, 近藤, 大晟 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000303

絵本における絵と言葉、擬人化の効果についての検討

—『ロバのシルベスターとまほうの小石』を例に—

花坂歩・佐野みなみ・小橋来実・近藤大晟

キーワード 絵と言葉 擬人化 家族愛

1 はじめに

本稿では、『ロバのシルベスターとまほうの小石』(ウィリアム・スタイグ作・絵、せたていじ訳、評論社、2006、新版)を絵と言葉の相補性の観点から分析するとともに、本作品が描き出す家族愛について論述していく。

作者のウィリアム・スタイグは漫画家、イラストレーターとして活躍したアメリカ合衆国の絵本作家である。本作品の原作『SYLVESTER AND THE MAGIC PEBBLE』は1969年に出版され、1970年のコールデコット賞を受賞している。この作品以外にも、1990年に発表された『みにくいシュレック(原題:Shrek!)』は2001年に『シュレック』としてアニメ映画化されている他、『アベルの島』(Abel's Island、1976)、『歯いしやのチュー先生』(Doctor De Soto、1982)がある。

2 作品の構成

この絵本は、横組み左開きの見開き16場面構成されている。文字は左から右へ、上から下へと配置されている。絵は水彩絵の具で描いたような淡さと鮮やかさがあり、見開きの片面のみや両面続きのページに描かれていたり、片面に複数枚の絵が描かれていたりする。登場人物に限らず、絵には輪郭線が描かれていることが多く、メリハリのある描かれ方である。

物語が展開される舞台は、「ムギ谷村」と魔法の石を拾った川べり、「イチゴ山」の3つである。「ムギ谷村」は主人公の「シルベスター」とその両親、仲間たちが住んでいる村である。川べりでは1人で遊んでいた「シルベスター」が魔法の石を見つける。この川べりは冒頭部にしか登場しない。「イチゴ山」は、「ムギ谷村」から「ニキロたらず」のところにある。幼い「シルベスター」が一人で訪れたり、その両親がピクニックの場所にしたりする一方で、ロバを襲う「ライオン」がいる場所でもある。

登場人物は、「シルベスター」、「シルベスター」の父親(「父さん」、「ダンカンさん」と表記される)、「シルベスター」の母親(「母さん」、「おくさん」と表記される)、「ライオン」、近所の人々、「シルベスターの友だち」(「子犬」、「子ネコ」、「子馬」、「子ブタ」)、2人の「けいさつ」、大勢の「ムギ谷村の犬」、「オオカミ」である。

便宜上、見開き16場面を5つの展開部に分け、以下のようにタイトルを付けた。

第1展開部	第1場面 「シルベスター」とその家族の登場
	第2場面 川べりで赤い小石を見つけた「シルベスター」
	第3場面 見つけた石が魔法の小石だと確信した「シルベスター」
第2展開部	第4場面 「ライオン」に出会い、岩に姿を変える「シルベスター」
	第5場面 不安な夏の夜を過ごす「シルベスター」
第3展開部	第6場面 「シルベスター」を探し始める両親
	第7場面 「シルベスターの友だち」や「けいさつ」に聞く両親
	第8場面 「シルベスター」を探す「ムギ谷村の犬」たち

- 第4展開部 第9場面 暮らす張り合いをなくす「シルベスター」の両親
 第10場面 秋の「イチゴ山」と「シルベスター」
 第11場面 冬の「イチゴ山」と「いっぴきのオオカミ」
 第12場面 春の「イチゴ山」の風景
- 第5展開部 第13場面 ピクニックに来た「シルベスター」の両親
 第14場面 「赤い小石」を見つけた「父さん」
 第15場面 元の姿に戻れた「シルベスター」
 第16場面 無事に家に帰った「シルベスター」と両親

第1展開部は「シルベスター」の登場から、「シルベスター」が、どんな願いも叶えてくれる魔法の石を見つけ、それを家に持ち帰ろうとしたところまでとした。

第2展開部は腹を空かせた「ライオン」から逃れるために、岩になりたいと願い、そのまま元に戻れなくなってしまふところまでとした。以降、岩になった「シルベスター」は動くことも声を出すこともできなくなる。

第3展開部は帰ってこない「シルベスター」を心配した両親が「けいさつ」や「ムギ谷村の犬」とともに「シルベスター」を探すが見つからないという場面である。

第4展開部は途方に暮れる場面である。両親はできることも尽き、つらい毎日を過ごす。「シルベスター」も望みを失い、「いっそ岩になりきろう」と思い、眠って過ごすようになる。そのまま、秋、冬、春と時間だけが流れていく。

第5展開部は好転の場面である。5月になり、「ダンカンさん(父さん)」は「おくさん(母さん)」を元気づけるために「イチゴ山」へピクニックに誘う。たまたま「おくさん(母さん)」が腰を下ろした岩が「シルベスター」で、たまたま近くに落ちていた魔法の石に気が付いた「ダンカンさん(父さん)」が岩になった「シルベスター」の背中の上に乗ることで、「シルベスター」は魔法を使えるようになり、元のロバの姿に戻ることができたという物語である。

3 人物についての検討

全16場面における登場人物の登場回数は、「シルベスター」が12回、「シルベスター」の父親と母親が8回、「ライオン」、近所の人々、「子犬」、「子ネコ」、「子馬」、「子ブタ」などの「シルベスターの友だち」、2人の「けいさつ」、大勢の「ムギ谷村の犬」、「いっぴきのオオカミ」が1回である。その他、語り手があり、三人称全知視点で語っている。

3-1 主人公についての検討

この作品において登場回数が最も多いのは、絵本の題名にも取り入れられている「シルベスター」(図1)である。物語は彼を中心に展開される。

第1展開部では、「シルベスター」の優しさと小石集めに対する思いが描かれている。「ムギ谷村のドングリ通り」に家族3人で暮らす「シルベスター」は「かわった形や、かわった色の小石を、あつめること」を楽しみにするロバの少年である。第2場面では、この作品において重要な役割を果たす「まほうの小石」(図1、ロバの右手)を見つけるのだが、その際、「小石をながめて、われをわすれて」しまふようなところもある。年齢は不明だが、少し子どもっぽい一面があると言える。一方で、「まほうの小石」の不思議な力に気が付いた第3場面では、「父さんや母さ



図1 シルベスターと赤い「まほうの小石」

んはもとより、しんるいや友だちにも、すきなことをさせてやろう！」と思うことから、自分が見つけた特別なものを独り占めせずに、他の人と共有することができる優しい性格でもある。

第2展開部では、「いつもはらをすかせた、いやしいやつ」(ライオン)に出会うのだが、恐怖心から「ぼくは岩になりたい」と言ってしまう、魔法で岩へと姿を変えてしまう(図2)。「シルベスター」は臆病で、軽率などところがある。その後は、第15場面で元に戻るまで、「イチゴ山」の岩の姿で描かれる。岩は、赤みがかかった色合いで描かれることが多い。岩の大きさはロバの「シルベスター」と同程度である。

第4展開部では「えいきゅうに岩のままだろうから、いつそ岩になりきろう」と思ったとある。そしてそのまま秋、冬、春という長い期間、一人で「ねむってすごすように」なる。岩に姿を変え、為す術がなくなったとは言え、元の姿に戻ることに強い執着心が感じられない描かれ方がされている。

3-2 その他の登場人物の検討

「シルベスター」の父親(図3、左)と母親(図3、中央)は衣服を着用している。どちらも二足歩行で、掃除や編み物をしたり、ピクニックでお弁当を食べたりする他、涙を浮かべて悲しんだり、家族で抱きしめ合って喜んだり、感情表現も豊かである。他の登場人物に比べて、擬人化が強い。本作品においては息子「シルベスター」のことを心から愛していることが読み取れる。例えば、なかなか家に帰ってこない息子を心配している第6場面から「シルベスター」が元の姿に戻る前の第14場面の間、2人の眉は常に下がっており、息子がなかなか見つからないことに対して悲嘆し、苦悩している(図4)。また、第14場面の左ページで赤い小石を見つけた父親は、「やあ、かわった石だなあ、シルベスターが見たら、よろこぶだろうに」と言い、小石を岩の上に置く。この行動からは、父親が「シルベスター」の趣味をよく理解していたことがわかる。さらに、母親も第14場面の右ページで岩の姿になってしまった「シルベスター」の気配を感じ取り、「ふしぎな むなさわぎ」を覚えている。まるで本能のように、息子が傍にいることを感じ取っている。これらからは「シルベスター」に対する2人の愛情の深さがうかがえる。

「ライオン」(図5)は第4場面のみが登場する。「いつもはらをすかせた、いやしいやつ」との記述があり、「シルベスター」を食べようとしていたことがわかる。「おれももうろくしてきたかな」という発言から、どちらかという年齢のライオンであると思われる。四足歩行である。服は着ていない。

近所の人々(図6)は第6場面のみが登場する。「シルベスター」の家の近所に住んでいると思われる。ブタの女性と2羽のニワトリが描かれており、それぞれ別々の家に住んでいる。ブタの女性の方はワンピースを着ており、二足歩行である。2羽のニワトリは、ニワトリらしく2本の脚で立っているのだが、擬人化は見られない。服も着ていない。



図2 岩になったシルベスター



図3 シルベスターと両親



図4 悲しいまなざしの母



図5 ロバを狙うライオン

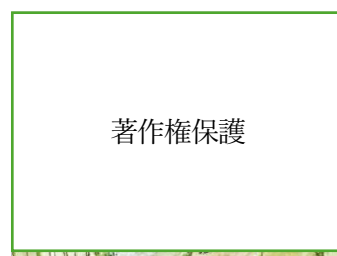


図6 近所に住む人々

著作権保護

図7 シルベスターの友だち

図8 2人の「けいかん」(警官)

図10 おっぴきのオオカミ

著作権保護

図9 ムギ谷村の犬

「シルベスターの友だち」(図7)は第7場面のみ登場する。「子犬」、「子ネコ」、「子馬」、「子ブタ」が作品中に登場している他、絵には2羽のアヒルのような鳥が描かれており、ボールや縄跳びなどで遊んでいる。いずれも服を着ていない。

2人の「けいかん」(図8)は第7場面のみ登場する。2人とも警察の制服を着たブタである。1人は椅子に座り、もう1人は立ちながら、「シルベスター」の両親の話を聞く。

大勢の「ムギ谷村の犬」(図9)は第8場面のみ登場する。絵では合計 22 匹描かれている。全員、衣服は着ておらず、四足歩行である。「シルベスター」を匂いで捜索するが見つめることはできなかった。

「いっぴきのオオカミ」(図 10)は第 11 場面のみ登場する。冬になった「イチゴ山」で、岩になった「シルベスター」に座りながら、「はらぺこの歌を、ほえにほえ」る。

4 いわゆる「物語の山場」について

この作品には3つの山場があると考えている。ここで言う「山場」とは、作品構造上の転換点や読み手にとっての高揚点を指している。1つ目は「シルベスター」が岩になってしまった第4場面、2つ目は「シルベスター」の心も岩のようにってしまった春のイチゴ山の場面(第12場面)、そして、3つ目は「シルベスター」が両親とともにロバに戻れたことを喜び合う第15場面である。

4-1 「シルベスター」が岩から戻れなくなってしまった第5場面

第1展開部において、「シルベスター」は「まほうの小石」を見つける。「まほうの小石」を見つけ、「父さんと母さんをおどろかせようといそいでうちへ」帰ろうとする「シルベスター」に読み手も思わず微笑んでしまうことだろう。ページをめくり、第4場面になると、「シルベスター」をにらみつける「ライオン」に出会い、思わず、岩へと姿を変えてしまう。主人公である「シルベスター」の姿が全く別のものに変化するという点で、大きな転換点である。

4-2 「シルベスター」の心も岩のようにってしまった第12場面

第2展開部では、「シルベスター」を捜索する両親の様子と、「シルベスター」の様子が書かれている。秋の第10場面では、「シルベスター」は「えいきゅうに岩のままだろうから、いっそ岩になりきろう」と思っていると語られる。夏の第5場面でも、「シルベスター」は眠ることを選択していたが、それは「ねるほかに、なにができるかという消極的な理由であり、「いっそ岩になりきろう」といった積極的な理由によるものではない。この第10場面では「おきていても、のぞみがない」とまで語られている。続く冬の第11場面では、「いっぴきのオオカミ」が「シルベスター」の岩の上で「はらぺこの歌を、ほえにはえ」る。それまでは「シルベスター」が文法上の主語になって物語が展開していたが、とうとう、「いっぴきのオオカミが、シルベスターの岩に」のように、目的格へと変化する。その後の春の第12場面では、「イチゴ山」の風景を説明するのみで、「シルベスター」という言葉すら見られなくなる。「雪」、「大地」、「お日さま」、「草木」、「木々」、「わかば」、「花」といった自然物のみで情景が描写され、「シルベスター」もそうしたものの一つとなる。この第12場面は、「山場」というよりはむしろ「谷場」といふべきところで、読み手の心持ちもひどく落ち込む場面である。

4-3 「シルベスター」がロバに戻ることができた第15場面

第13場面から第15場面にかけては、徐々に期待が膨らんでいく展開となっている。第13場面では、岩になって眠っていた「シルベスター」が両親との再会をきっかけに目覚め、心を取り戻す。続く第14場面では、父親がたまたま「まほうの小石」を見つけ、たまたま岩になった「シルベスター」の上に置くことで、「シルベスター」が「まほうの小石」を使える状態になる。母親も「近くにいるような気がする」と言うなど、読み手に対して、「シルベスター」が元に戻れるという期待を抱かせるような書きぶりとなっている。そして、第15場面で「シルベスター」は「ほんとのぼくにもどりたい！」と「しんけんに思」うことで元のロバに戻ることになる。それを家族3人で喜び合う。ここは物語上、最大の高揚点である。

4-4 小括(「山場」を含めたその他の構造分析)

山場については、4-1、4-2、4-3で述べたとおりであるが、その前後には、山場を効果的にする様々な工夫が施されている。

まず、絵の構図についてである。第1の山場である第4場面の後の第5場面(次頁 図11)と、第10場面(次頁 図12)、4-2で述べた状況の落ち込み(いわゆる谷場)の第12場面(次頁 図13)はいずれも見開きで「イチゴ山」の風景を描き、その右側に岩の「シルベスター」をぽつんと配置している。この構図は最終の春の

場面においても同様である。岩の「シルベスター」を描くだけなら見開きである必要はない。左ページに遠方の山や広がる草原を描くことで、岩の「シルベスター」の孤独感を効果的に表現することができている。特に、「イチゴ山」の四季の変化とは対照的に、岩の「シルベスター」は変化しない。その対比が「シルベスター」の無力さをも表現している。

家族愛については物語の終末部における家族の笑顔(図 15)からも明らかであるが、作品構造上においても、「シルベスター」と「シルベスター」の両親の心理変化が類似している。「シルベスター」は、第5場面で「もう一ど、もとのすがたに、もどれたらなあ」と願っている。このときはまだ、元に戻れるという望みが捨てられていない。しかし、時間が過ぎ、心も岩のようになり、望みを見失っていく。その後、第 13 場面で「シルベスター」の両親と再会することで、第 15 場面で「ほんとのぼく」に戻りたいと願い、望みが叶う。一方の両親も、第2展開部で、帰宅しない「シルベスター」を心配し、帰ってきてほしいという願いを強く持つ。このとき、きっとまた会えるはずだという望みを捨ててはいない。しかし、時間が過ぎ、「二どとむすこにあえまい」と望みを失いかける。その後、第 15 場面で「シルベスター」と再会することで、望みが叶う。こうした構造上の類似も特徴の一つである。

さらにもう一つ、第1場面と第 16 場面の類似も重要である。第1場面では、親子3人の日常的な場面が描かれ(前出図3)、最後の16場面では、同じく自宅にて抱きしめ合う親子の姿で締めくくられる(図 15)。この最終場面に至るまで、「シルベスター」は川べりで様々な願いを叶えてみたり、岩になりたいと願ったり、岩の姿から戻りたいと願ったり、魔法の力のそばにいた。しかし、第 16 場面では「まほうの小石」は金庫にしまわれ、「今のところ、のぞむことはありませんでした。みんなののぞみが、すっかりたりたのですから」という言葉が添えられる。最後の場面からは物理的にも心理的にも家族の距離が縮まっている様子が読み取れる。

5 この絵本における絵と言葉、擬人化の効果についての検討

『ロバのシルベスターとまほうの小石』は、「シルベスター」の姿の変化と心の変化を軸に物語が進んでいく。岩になってしまった「シルベスター」は話すことや行動することはもちろん、感情や思いを表出することすらできなくなる。語り手も「シルベスター」の心中を積極的に語らないため、読み手は推測するしかない。

松居(2001:53)は「子どもたちは絵を読むのです。大人の方は絵を見

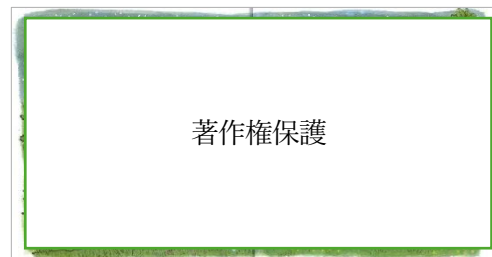


図 11 夏のイチゴ山



図 12 秋のイチゴ山

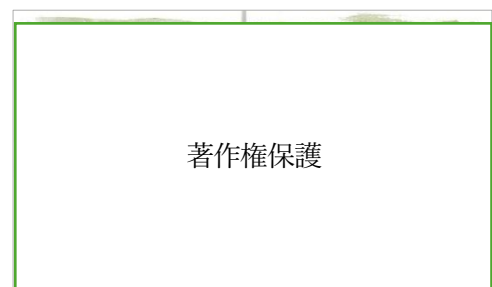


図 13 冬のイチゴ山



図 14 春のイチゴ山

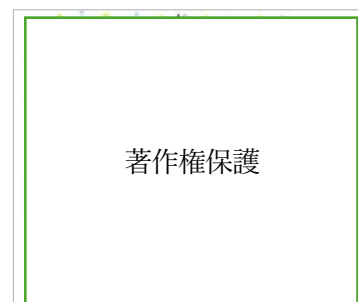


図 15 抱きしめ合う親子

ますが、子どもは絵を読む。絵の中にある言葉を読む。そしてまったく同時に耳から言葉の世界を体験する。耳から聞いた言葉の世界と目で見た言葉の世界が子どもの中で一つになります。そこに絵本ができる」と述べている。本作品の第2の山場(谷場とも述べた)であった第12場面を見ると、左のページには「イチゴ山」の風景を説明する言葉が書かれているのだが、岩の「シルベスター」が描かれた右のページには言葉がない(前頁図14)。このことは、「シルベスター」は心も岩のようになり、言葉を失ったという解釈を可能にする。この、言葉を使わず絵で語るといふ伝え方は絵本ならではの表現である。

また、本作品の特徴の一つとして擬人化がある。本作品の動物たちは、人間のように会話をしたり、主人公の「シルベスター」やその両親、ブタが二足歩行で歩いたり、動物が人間であるかのような動きをしている。こうした擬人化によって、「家族愛」というテーマが、押しつけがましくなく、読み手に伝えられてくる。例えば、第3展開部の、両親たちが必死になって「シルベスター」を探す描写や、行方がわからなくなった息子を心配し、悲嘆する表情を浮かべる両親の描写からは深い愛情を読み取ることができるのだが、必ずしもそのような家庭環境で育ってきた読み手ばかりではない。登場人物が動物であればこそ、読み手においては、それは動物生活の中で起きていることだと割り切ることができる。この作品では、擬人化によって人間生活を描きつつも、登場人物のすべてが動物であることで、物語は人間生活から離れたところで展開される。この近くて遠いという心理的距離感が擬人化の効果である。なお、登場人物が擬人化されていることが本作品の特徴の一つであるが、「ライオン」がロバである「シルベスター」を食おうとしたり、「オオカミ」が一匹で遠吠えをしたりする場面からは、若干の野生性を感じる。その他にも「シルベスター」の家の近くに住んでいたニワトリも、「シルベスター」を探し回る犬たちも、少々、人間味に欠ける。このように、登場する動物たちの擬人化に軽重を付けていることもこの作品の特徴である。

さらに、本作品の作家であるウィリアム・スタイグ(William Steig)について、藤本(2018:186)は、「この作品の制作当時、彼は妻と離婚して、愛娘マギーも母親と一緒に出て行ってしまっていたと言う。その別離の寂しさの中、彼は当時の自身の思いを、ダンカンの両親が子どもを失った姿に重ねて描いたのであろうと思われる」と述べている。こうした関連知を踏まえれば、「シルベスター」が岩になって語れなくなってしまったことや家族との奇跡的な再会を題材に、さらなる深読みを楽しむこともできるだろう。

国語科における家族に関する教材の取り扱いについて、大沢(2016:31)は文学教材を通じて様々な家族の形や家族に対する思いを知ることが教育的に意味のあることであると考察している。その意義を大沢は次のように述べている。

実生活の自分の家族について直接考えたり、生活の中で実践したりすることが求められる他の教科に比べて、国語科で家族と関わる文学教材を扱うことは、自分の家族とは違った関わり方を知ったり、家族に対しての考え方を広げたりすることにつながると考えられる。

『ロバのシルベスターとまほうの小石』には家族の協力が描かれている。これは大沢のいうところの家族の形の一つを知ることであり、家族に対しての考え方を広げることに他ならない。家族の形が多様化する現代であっても、家族や家庭生活と無縁では生きていけない。そのように考えると、『ロバのシルベスターとまほうの小石』は道徳の学びと関連付けることも有効であろう。

「家族愛」に関しては、小学校と中学校ともに、「C 主として集団や社会とのかかわりに関すること」の「家族愛、家庭生活の充実」という項目で取り扱うことができる。さらには、「まほうの小石」を得た直後(第5場面)には、「シルベスター」は両親以外にも親類や友達を思い遣っており、家族以外への愛を含めることも可能である。これは、『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編』の「A 主として自分自身に関するこ

と」の「個性の伸長」という項目、『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編』の「3 向上心、個性の伸長」という項目と関連付くことになる。

7. おわりに

本稿では、ウィリアム・スタイグ作の『ロバのシルベスターとまほうの小石』(評論社、2006)を取り上げ、絵本における絵と言葉、擬人化の効果について検討した。大人である私たちが絵本を読み味わうことで、それを子どもにも伝えられるようになる。引き続き、絵本探索と作品研究を続けて、子どもに伝えるべき絵本の蓄積を増やしていきたい。

附記 本稿における作品分析の方法は花坂が提案し、佐野、小橋、近藤が具体化した。第5節の考察については、それぞれの着想を元に4者による検討を通してまとめている。なお、本研究は JSPS 科研費 JP21H00868 の助成を受けての成果である。

引用・参考文献

大沢貴代美(2016) 小学校における家族像：国語科と他教科の比較から、日本語と日本文学、59、23-32

藤本朝巳(2018) アメリカの絵本作家 William Steig 研究：生涯とその描写法を探る、フェリス女学院大学文学部紀要、53、177-187

松居直(2001) 絵本がめざめるとき、河合隼雄・松居直・柳田邦男『絵本の力』、岩波書店、45-82

文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編』

文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編』

引用図書

ウィリアム・スタイグ(作・絵)・せたていじ(訳)『ロバのシルベスターとまほうの小石』、評論社、2006

※原題『Sylvester and the magic pebble』(1969)

(はなさかあゆむ／大分大学)

(さのみなみ／大分大学)

(こばしくるみ／大分大学)

(こんどうたいせい／大分大学)